

「はじめてのキリスト教」説教要旨
弱肉強食？

(ルカ一九・一〜二〇)

「強者は勝つて生き、敗者は敗れて滅びる」。これは進化論を提唱した一九世紀の科学者、ダーウインの言葉である。確かにこの世を見渡す時この言葉にはそれなりの真実が含まれていることは事実である。仕事、恋愛、スポーツ。そこにはみんな「勝ち負け」がある。特にチームスポーツではチームとしての勝ち負けだけでなく、同じチーム内でもポジション争いもあるのだ。確かに「弱肉強食」である。

今朝の箇所には「強さ」と「弱さ」が混じりあった一人の男が登場する。以下、弱肉強食こそがすべてのように思われるこの世の現実には生きていく私たちに向けられた神のみことばに心を向けたい。

一、真の強者ではなかったザアカイ

ルカはこの物語の主人公であるザアカイについて「取税人のかしら」で「金持ち」であったと紹介しているのだが、これを今日的な目で見るとやはり勝ち組に見えてくる。お金持ちの税務署長。

いいじゃないか。しかし事実は違う。当時のユダヤ社会において、同胞から税を集め、ローマ帝国に上納することを生業にしている取税人たちは「裏切り者」だった。また取税人達は往々にして集められた税金をポケットに入れていたので彼らは「鼻つまみ者」でもあった。そう考えると確かに彼は金持ちだったが疑いなき勝者では決してない。むしろ金銭の代わりに友を失ったさびしい男だったのである。このようにザアカイは「強さ」と「弱さ」の両面を持つ、普通の「人間」だったのである。

二、ザアカイとイエスの出会い

そういつたザアカイの暗い面が透けて見えるのが三節である。人々は金持ちで幅を利かせていた「裏切り者の小男(一!)」に道を譲ることをしなかつた。ひよつとしたらこの時とばかりに仕返しをたくらんだのかもしれない。だがザアカイはあきらめない。何とかしてイエスを一目見ようと、あろうことか彼は木に登った。なぜザアカイがこれほどまでにイエスに執着したかについて明瞭な理由は語られていないが、或いは「神のみ子」と呼ばれると同時に「罪人の仲間」とも噂されていたイエスの二面に親近感を抱いたのかもしれない。

そんなザアカイに対し、イエスは言われた。「きようは、あなたの家にとまること

にしてあるから。」しかしこれは単なる思いつきではない。ちなみに英語の新国際訳では「私は今日あなたの家に泊まらねばならない」としている。ここにはイエスの決意がある。イエスは何としてもザアカイの家に泊まらねばならなかったのだ。しかし「なぜ」そうしなければならなかったのだろうか。

三、尋ね出して救うイエス

この問いの答えは一〇節にある。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」。人の子とはイエスご自身を指す。つまりイエスがザアカイの家に泊まることを決意したのは、失われた「彼」を捜して救うためだったのである。

更に注目すべきはイエスの「救い」の方法である。金持ちではあるが人にうとまれ、真の友を知らなかつたザアカイの家の客となることは、イエスにとつてはリスクーな選択だった。「類は類を呼ぶ」というのではないか。実際この出来事を見つめていた人々は「あの方は罪人の所に行つて客となられた」とつぶやいている。だがイエスはお構いなしだ。むしろ彼は積極的に弱者であるザアカイを捜し、語り、人生を変えたのである。このようにイエスの救いは天国から憐れみを垂れ「どれどれ、救つてやろうか」と綱を下ろすような尊大な

ものではない。むしろ私たちの所に自ら降りてきて、わたしたちの弱さ、恥、のしりなどのすべての痛みを共に担つて下さる、愛と連帯の救い主なのだ。

* * *

イエスに声をかけられた時、ザアカイは急いで降りてきて、そして大喜びでイエスを迎えた(六節)。ちよつと想像を働かせてみよう。滑稽な情景が思い浮かぶはずだ。小さい体をめいばいに反らせて威張り散らし、カネにモノを言わせていたあの取税人の頭目が、上等の着物の裾をからげ、するすると子ザルの如くに降りてくるのだ。何とも不格好で、嘲笑の標的になりかねない情けない姿である。しかし今や、人からどう見られるかなどということではザアカイにとつてはどうでもいいことであつた。あのイエス様と一緒に食事ができる特権がそこにあるのだ。つべこべ言つてはいろいろなではないか。彼は急ぎ、喜びをもつてイエスのことばに応答し、そhして救われたのだ。イエスは今日も私たちを捜している。その声に素直に応答しよう。主は言われる。「心の貧しい者は幸いです。天のみ国はその人たちのものだから。」弱く、貧しい自らを認め、「今日」主の救いを受け取ろうではないか。アーメン。

(中川恵理也神学生)